

一八八四年六月二十日(金)

タクール、聖ラーマクリシュナ、南ドツキネーシヨル神寺院において、スレンドラ、バヴァ
ナート、ラカール、ラトウ、校長、アダルなど、信者たちと共に

バブラーム、ラカール、ラトウ、ニランジャン、ナレンドラたちの性質

タクール、聖ラーマクリシュナは、南ドツキネーシヨル神寺院の自室で信者たちといっしょに坐っていらつしやる。
夕暮れになったので、宇宙の大実母の名を称となえ、かつ想っておられる。部屋にはラカール、アダル、校長、
その他、一、二の信者がいる。

今日は金曜日——ジョイスト月黒分十二日目、一八八四年六月二十日。五日後にラタ・ヤートラ
(山車だしの祭り)を控えている。

間もなく、神殿で献灯アトラテイが始まった。アダルはそれを拝観に行った。タクールはモニ(校長)を相手に
話しておられる。モニの教訓のために、信者たちのことを何かと楽しそうに話していらつしやる。

聖ラーマクリシュナ「アッチャ、バブラームは勉強する気があるのかねえ? バブラームに、『人
に手本を見せるつもりで勉強しろ!』と言ったんだよ。シーターが助かった後でも、ヴェビーシヤナ

は王様にならなかつた。ラーマはこう言いなすつた——『お前は、愚かな人々を導くために王になりなさい。さもないと彼等が言うだろうよ——ヴィビーシヤナはラーマのために尽くして、いったい何をもたらつたのか』と。——王国を得たのを見たら、さぞ満足するにちがいない』と。

お前にいつか言つたと思うが、バブラームとバヴァナートと、それからハリシユは女性的な性質だ。

バブラームのことを見たよ——女神の姿だつた。首にネックレスをして、侍女といつしよだつた。あれは夢で何かを受けたね。あれの体は清浄だ。もう少し何かすれば、あれは覚るよ。

ね、身のまわりの世話をしてくれる人に不自由しているんだよ。あれがここに来て住んでくれると都合がいいんだがねえ。ここにいる連中はみんな、境地が一段と進んできている。ノト(ラトウ)はのほりつ放し(常に靈的興奮状態にあること)で、もうじきいつしよ(神と合一する)になるだろうし——。

ラカールの性質ときたら、わたしが水を持ってきてやらなけりやならない！ わたしの世話をしてくれるどころじゃないのさ。

バブラームとニランジャン——この二人を除けてほかにいるかい？ もし誰か来たとしても、教えるうけたら行つてしまふと思うよ。

でも、無理矢理来いと言わうけじゃない。家でイザコザが起こるかも知れないからね。

ははははは、わたしが、ここへおいでよ』と言つたら、あれ(バブラーム)の答え方がいい——『あなた様が来させて下さい！』ラカールを見て、さめざめ泣くんだよ。君はいいなあ』と言つて。

ラカールは、この子供みたいだよ。もう世間のことに執着はないと、わたしは看^みている。『ああいうものはみな、味気なくなりました!』と言っている。あれの嫁がここに来てね——歳は十四だ。ここからコンナガルに行った。嫁や家のものがあれに、『コンナガルにいっしょに行こう』と言ったが、あれは行かなかつたよ。『お祭りさわぎは好きじゃない』と言って——。

お前、ニランジャンをどう思う?」

校長「はあ、大へんな美^{ハシヤム}青年ですなえ!」

聖ラーマクリシュナ「いや、見た目だけじゃない。純真で素直なんだよ。素直になれば神様のところへ楽に行ける。素直になれば、教えはすぐ役に立つんだよ。よく耕して石ころ一つない土地だから、タネさえ蒔けば、樹になつてすぐ実を結ぶ。

ニランジャンは結婚しないだろうよ。お前、どう思う? 女と金が人を縛るんだろう?」

校長「おっしゃる通りでございます」

聖ラーマクリシュナ「バーン(キンマの葉)やタバコをやめたつて何になる? 女と金を捨てること
がほんとの捨離だ。

前三^{バウツ}昧のとき見たが、もし勤めに出ても、あれは汚れに染まらないよ。母親のために働いているんだから、ちつとも悪いことはない。

お前のしている仕事も悪くない——いい仕事だ。

事務員が捕まつて監獄に入れられて、また出された。出されて自由になつたからつて、シャナリ、

シヤナリと踊りでもおどっているかい？ 彼はまた事務員になって働くさ。お前は金を貯めるのが目的じゃない。ただ家族を食べさせたり着せたりするためだ。そうしなけりや家族は路頭に迷うだろ？」

校長「誰かが引きとってくれたら、どんなにかホツとすることでしょうが——」

聖ラーマクリシユナ「何を言うんだか——。今はこれもしてあれもしなさい」（訳註、これもあれも——浮世のつとめと靈の修行と）

校長「何もかも捨てることできたら、幸福でしようねえ！」

聖ラーマクリシユナ「何を言うんだか！ 前世サムスカからの因縁があるからね。お前にはまだ少し仕事カルクの残りがあるのさ。それを仕終えてしまえば平安になる。そのときは解放されるよ。病院に名前が登録されている間は、そう簡単に出られない。病気がすっかり治ったら出られる。

ここに來る信者たちは二通りある。一つのグループはこう言う——私を救って下さい、神様！もう一つのグループは——内輪の仲間だが、彼らはそんなことは言わない。彼らは二つのものがわかればいいんだ。第一に、わたし（聖ラーマクリシユナ）は何者なのか？ それから、彼らは何者なのか——わたしとの関係はどういうものか？

お前はあとの方のグループだよ。そうでなけりや、こんなふうにして………」（訳註）

（訳註）『コタムリト』ベンガル語原典全五巻の中には「………」や「***」で印字された箇所が九ヶ所存在する。これは一般の人には公言しない方がいいとマヘンドラ・グプタが判断した内容や、自分への個人的な教えのようである。

〔ナレンドラ、ラカール、ニランジャンの男性的態度——バブラームとバヴァナートの女性的態度〕
 「バヴァナートやバブラームたちは女性的な性質だね。ハリシユは女の着るものを着て寝る。バブラームはああいふ様子が好きだと言っている。だから、わたしの見方は当たっているんだ。バヴァナートも同じことだ。ナレンドラ、ラカール、ニランジャンたちは男っぽい態度だよ」

〔腕の怪我の意味——神通力(Magic)と聖ラーマクリシュナ〕

「そうそう、腕を怪我したのはどんな意味があるんだろうね？ 前にも前三昧状態のとき、歯を折ってしまった。こんどは前三昧で腕を折った」

モニが黙っているのを見て、タクールはご自分でこうおっしゃった——

「腕が折れたのは、我執を根こそぎにするためさ！ 今はずもう、なかに私を探すことはできない。探していけば、あの御方のいらっしやるのが見えるだけ——。我執がすっかり無くならなけりや、あの御方のところへ行けないよ！

チャタク鳥をご覧、地面に住んではいるが、あんなに高く舞い上がるよ！

「そうそう、キャプテンが言うんだ——『魚を食べるから、あなた(タクール)は神通力がつかないんだ』と。あんな力がついたら……、と思うと身震いがするよ！ 今もし、神通力なんかがあったら、ここは医者ドクターのいる病院みたいになつてしまふよ。人が来てはみんなこう言う——『私の病気を治して下さい』

い！」と。神通力のどこがいいんだね？」

校長「よくありませんとも。あなた様がおっしゃいますように、八大神通力のうち一つでも持っていたら至聖かみに達することはできません」

聖ラーマクリシュナ「その通りだよ！ 知性の低い連中が神通力を欲しがらんのだ。金持ちのところへ行って何かねだった人は、もう尊敬も歓迎もされない！ そんな人を、同じ馬車に乗せてはくれぬい。もし乗せても、そばに坐らせてはもらえない。だから、無私ニシユカマバクテの信仰、無条件アヘトウキョーバクテの信仰——これが最勝最上のものなんだよ」

〔有形の神も無形の神も二つとも真実——信者の家がタクルの集いの場〕

「形のある神、形のない神、二つとも真実だ。どう思う？ 形のない神、つまり無相の存在というものを長い間考え続けてはいられまい。そこで信者のために、神は形を現して下さるんだよ。

キャプテンはうまいこと言った——鳥も大空高く翔びつづけて、くたびれると木の枝に止まって休むとね。無形の神のあとが有形の神だ。

お前のところの集いの場すまい（住居）に一度行こうと思っている。前三昧パイヴァで見たんだよ——アダルの家も、スレンドラの家も、バララームの家もみんな——わたしの集いの場になつてることを。

でも、やつぱりあれたちがここドゥキネーショル（南神寺院）に来ないと、わたしは満足できない」

〔信者と共に活動するのにも魔法のうち——チャンディー——慈悲は神に属す〕

校長「ま、そんなことがあり得ましようか？ 幸福を感じればこそ不幸があるのです。あなた様は不幸を超越していらつしやいます」

聖ラーマクリシュナ「ウン、それにわたしはこう見えている——魔術師と魔術師の行う手品。魔術師だけが実在だ。彼の手品はみんなその場限りのもの——一時的なもの——夢のようなものだ。

チャンディー（女神信仰の聖典）の朗読を聞いていたとき、それがわかつたんだよ。このシムムバとニシムムバが生まれた。それから何ほどか経つてから死んでしまったということ聞いた」〔訳註——シムムバ、ニシムムバは魔神の兄弟で世界を支配しようとしたが、大女神がドウルガーやカーリーの姿になって打ち倒した〕

校長「はい、私、ガンガールといつしよに汽船でカルナにまいりました。その時一そうの小舟が汽船にぶつかつて、その舟の二十人から二十五人位の人が沈んでしまいました！ 汽船のかき立てる波間の泡のように水に消えてしまったのです！

そうだ、その魔術を見ている人には慈悲の心はあるのでしょうか？ 何か私が——のようなのを感じるのでしょうか？ 私がしている——と感じた時にしか慈悲心は起こらないのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「その人は、いちどにすべてを見ているんだよ——神、マールヤー、人間、世界——全部を。〔訳註、その人——原典は、その人だが、スワミ・ニキラナンドは、智者——と訳している〕

その人は、マールヤー（明知のマールヤーと無知無明のマールヤー）も生き物も世界もあつて、しかも無い、と見ているんだ。自分の私があるかぎり、そういうものも皆ある。智慧の剣で切り捨てたあととは、

もう何も無いんだ！ そのときは、自分の私々までも、魔術師の手品の一つになってしまっただよ！」
モニはしばし熟考している。聖ラーマクリシュナはおっしゃった——

「どういうふうだか、わかるかい？ 二十五弁の花びらのある花を一撃で切り落とすようなものさ。

私がしているだつて？ ラーマー！ ラーマー！——シユカデーヴァ、シヤンカラ大師アーチャリヤ、こうい

方々は、明知の私々を残しておきなすった。慈悲は人間のものじゃない。慈悲は神のものだ。明知の私々のなかには慈悲があるし、その明知の私々はあの御方がなつていなさるんだよ」（訳註、ラーマ！ ラーマー！——困った時に使う慣用句で「おお、神様！」ほどの意）

〔大へん内密な話——カーリーブラフマン——根元造化力の場——カルキの化身〕

「しかし、何千回魔法を見て、魔法だ、魔法だ」と思ったところで、あの御方の支配下(Under)から逃れる方法はないよ。お前の自由独立なんて、どうして、どうして——あの御方がおさせになる通りにしなけりやならないのさ。その根元造化力アディヤンシャクテイがブラフマン智を授けて下さったら、ブラフマン智が得られる。そうすりゃ、魔法のあそびが見られる（すべてが魔法だと悟ることができる）。そのほかに方法はないんだ。

少しでも私々がある間は、あの根元造化力の場にいるんだよ。あの御方の支配下だ。あの御方から逃れる道はない。

根元造化力の助けによつて、神アヴァタタラの化身の活動はある。その御方の力で化身するんだ。そして、化身

は仕事をさせるんだよ。何もかも大実母の力だ。

カーリー殿の以前の支配人に誰かが大きな頼み事をする、その支配人はいつも、『二、三日あとで来て下さい』と言ったものだよ。持ち主に聞かなくてもやらんからね。

この末世の終わりにカルキが化身するだろう。バラモンの息子で——自分がそれとは何一つ知らないで——突然、馬と剣が彼のところに来るだろう」(訳註、カルキ——カリユガの終わりに、白馬にまたがり、光り輝く剣をたすさえて現れるとされるヴィシヌ神の十化身の最後の化身)

〔ケーシャブ・センの母と姉妹——産婆ブヴァンモヒニー〕

アダルが献灯を拝観してきて部屋のなかに坐った。産婆のブヴァンモヒニーは時々、タクールにお目にかかりに来る。タクールは、皆の持つてくるものを召し上がることはお出来にならない——特に医者やカヴィラージ(インド伝統医学の医者)や産婆からのものは。患者たちが大そう困っているのに彼等は金を受けとるので、そのために召し上がることができないのである。

聖ラーマクリシュナ(アダルたちに向かつて)ブヴァンが来てね、ボンベイ産のマンゴーを二十五個とサンデシユとラスグツラを持つてきた。わたしに、『マンゴーを一つ、召し上がりませんか?』とすすめるからわたしは、『胃が重苦しくてね——』と言ったよ。それにほんとの話、ほんの少しカチヨリとサンデシユを食べたら、どうも胃の具合がおかしいんだよ。(訳註、サンデシユ——ミルク菓子、ラスグツラ——シロップに浸した丸いドーナツで実に甘い。カチヨリ——サモサに似たインド風揚げパン)

第27章 ^{ドゥキネーショル}南神寺院において信者たちと共に

「ケーシャブ・センのお母さんと姉妹たちが来たよ。それでまたすこし踊った。ほかに何をしたらいいんだ！ ひどく悲しんでいるんだからね」